

## ウイグル語における再帰代名詞の人称

藤家洋昭  
大阪大学

Reyihan Pataer  
甲南女子大学

### 1. はじめに

ウイグル語は、基本語順 SOV で形態的には典型的な膠着語タイプの言語である。また、人称を示す形式が発達していて、文の述語は、人称（と数）に応じて、5つの異なる形で主語との一致を示す。

ウイグル語にも、他の多くの言語と同様、再帰代名詞と呼ぶことのできる形式が存在し、主語として用いられた場合は、述語との一致を示すが、再帰代名詞の人称の示し方は、普通名詞とも、人称代名詞とも異なる。ウイグル語の再帰代名詞の人称の示し方自体は、当然すでに知られているが、これまでの研究は、比較的最近のものでも、筆者らが知る限り、データの提示にとどまっていて、メカニズムの分析・記述はほとんどなされていない<sup>[1]</sup>。特に、普通名詞や人称代名詞とのふるまいの違いについての分析はほとんどない。そこで、本研究では、ウイグル語の再帰代名詞の人称を、普通名詞や人称代名詞の人称との違いに着目し分析・記述する。分析は、語彙主義に立ち、HPSG（主辞駆動句構造文法）の枠組みで行う。そして、ウイグル語の再帰代名詞の人称が素性の単一化にもとづいて分析されることを示す。

### 2. データ

ウイグル語の再帰代名詞とそれに関連するデータを見る。

まず、「自分」を表す、öz という形式に所有接尾辞と呼ばれるものが付いて人称（と数）を

表す。

人称	単数	複数
I	öz-em	öz-imiz
II	öz-ingiz	öz-englar
III	öz-i	öz-lir-i

そして、主語として用いられた場合、述語との人称・数の一致を示す。

例

(1) Öz-imiz keldu-q.

自分・所接一複 来た・一複 「私たち自身が来た。」

(2) Öz-i keldi.

自分・所接三単 来た・三単 「彼／彼女自身が来た。」

このように、所有接尾辞と述語動詞はきれいに一致し、再帰代名詞の一致に所有接尾辞がかかわっていることは一目瞭然である。

### 3. 所有接尾辞

前節でふれた所有接尾辞とはどのようなものか、もう少し詳しく見ておく。

所有接尾辞は、名詞の後につく自立性の弱い形式で、普通名詞に付いた場合は、所有者の人称・数を表す。

一覧

人称	単数	複数
I	-(i)m	-(i)miz
II	-(i)ngiz	-(i)nglar
III	-(s)i	

例

mashina 「クルマ」

mashina-m 「私のクルマ」

mashini-miz 「私たちのクルマ」

mashini-si 「彼の／彼女のクルマ」

普通名詞に所有接尾辞が付いた場合、所有接尾辞の人称は付いた名詞の人称に影響を与えず、所有接尾辞が付いた名詞の人称は、所有接尾辞の人称にかかわらず、三人称形の述語と一致する。この点が再帰代名詞と普通名詞で大きく異なる。

(3) Mashina keldi.

クルマ 来た・三 「クルマが来た。」

(4) Mashini-miz keldi.

クルマ・所接一複 来た・三 「私たちのクルマが来た。」

(5) \*Mashini-miz keldu-q.

クルマ・所接一複 来た・一複

## 4. 分析

### 4.1 分析方法

本研究では、2 章と 3 章であげたデータを、語彙主義に立ち、主辞駆動句構造文法<sup>[2][3]</sup>の枠組みで分析する。すなわち、語彙項目、文法規則、文法原理の相互作用で文法性を記述する。

### 4.2. 所有接尾辞は主辞か

ウイグル語は、先に述べたように、基本語順 SOV の言語である。基本語順 SOV の言語は、日本語など主辞が右側に来る言語が多く、ウイグル語も例外ではない。例えば、補語-主辞、指定部-主辞、付加語-主辞、いずれの場合も主辞が右側に来る。したがって、öz+所有接尾辞の場合も、右側に来る、所有接尾辞が主辞であると分析するのは自然なことである。

所有接尾辞が主辞だとすると、所有接尾辞は、人称素性を持ち、名詞を補語にとる特殊な名詞と考えることができる。この分析により、再帰代名詞と述語動詞の人称の一致をうまく記述することができる。ところが、この分析には致

命的な欠点がある。普通名詞の所有表現が、正しく記述できないのである。つまり、次のように、実際には非文である(6)が認可され、実際には文法的である(7)が排除され、事実と異なる予測をしてしまう。

(6) \*Mashini-miz keldu-q. (=5)

クルマ・所接一複 来た・一複

(7) Mashini-miz keldi. (=4)

クルマ・所接一複 来た・三

この問題を解決するためには、普通名詞に付く所有接尾辞と再帰代名詞に付く所有接尾辞は別物で、普通名詞に付く所有接尾辞は、述語との一致に関してはすべて三人称であるとする事等が考えられるが、一般性を欠く分析と言える。

したがって、所有接尾辞が主辞であるとの分析は適当ではない。

### 4.3 マーカー接尾辞分析

前節で試みた、所有接尾辞主辞分析に代わる分析として、本研究では新たにマーカー接尾辞分析を提案する。これは、所有接尾辞は主辞ではなく、前にくる名詞に情報を与える接辞であるという分析である。

ウイグル語は接尾辞の種類が豊富であるが、それらの文法的性質は一様ではない。所有接尾辞のような、主として統語情報を持つ接尾辞をマーカー接尾辞と呼ぶことにする。

マーカー接尾辞という新たな範疇を立て、かつ、新たな文法規則を立てることになるが、ウイグル語のような、いわゆる膠着語、つまり接辞のような自立性の弱い形式が発達した言語の分析には必要であると思われる。また、所有接尾辞は、前述のように、あらゆる名詞に付く可能性があり、また本稿では詳しく触れないが所有接尾辞以外にもマーカー接尾辞と考えられるものがウイグル語には存在するので、このような新たな範疇・規則を立てることに大きな問題はないと考える。

そこで、次のような文法規則を導入する。あ

わせて、マーカー接尾辞を示す MKSFX 素性を導入する。

#### (8) 主辞・マーカー接尾辞規則

$$\left[ \begin{array}{c} \text{word} \\ \text{MKSFX} \langle \rangle \end{array} \right] \rightarrow \text{H} \left[ \begin{array}{c} \text{word} \\ \text{MKSFX} \langle \text{I} \rangle \end{array} \right] \quad \text{I}$$

この規則の意味するところは、語が接尾辞を取り、語が接尾辞と合わさったものはやはり語である、ということである。主辞・補語規則と似ているが、主辞が左側に来ることと、出来たものが句ではなく語であること等が異なっている。この規則により、所有接尾辞は語を構成する要素であることが保証される。

#### 4.4. 語彙項目の記述

次に必要なことは、語彙項目の記述である。なお、ここでの議論に直接関係のある素性に限っている。

まず、*öz* は次のような語彙項目を持つと分析する。

$$(9) \quad \left[ \begin{array}{c} \text{SYN} \left[ \begin{array}{c} \text{HEAD} [\text{AGR} \text{I}] \\ \text{MKSFX} \langle [\text{AGR} \text{I}] \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$

すなわち、*öz* 自身は人称に関する情報を直接持たず、人称に関する情報は所有接尾辞が持つものとの単一化によって得られる。

一方、普通名詞は次のような語彙項目を持つと考えられる。

$$(10) \quad \left[ \begin{array}{c} \text{SYN} \left[ \begin{array}{c} \text{HEAD} \left[ \begin{array}{c} \text{AGR} \left[ \begin{array}{c} \text{PER} \text{ 3rd} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

つまり、普通名詞は、はじめから三人称の素性を持っているのである。

また、人称代名詞のうち、例えば一人称単数の *men* 「私」の語彙項目は次のようになる。

$$(11) \quad \left[ \begin{array}{c} \text{SYN} \left[ \begin{array}{c} \text{HEAD} \left[ \begin{array}{c} \text{AGR} \left[ \begin{array}{c} \text{PER} \text{ 1st} \\ \text{NUM} \text{ sg} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

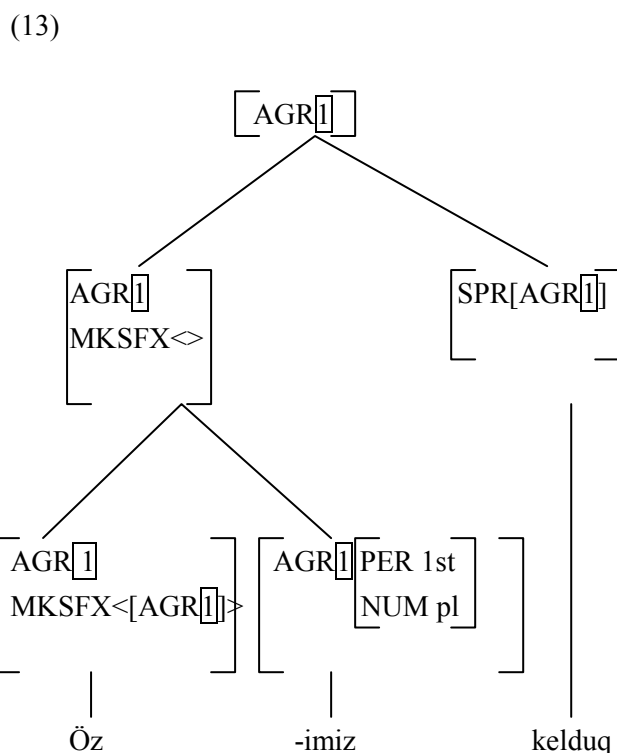
つまり、人称代名詞は、人称と数の素性を語彙項目に持っているのである。

そして、所有接尾辞のうち、例えば *-miz* の語彙項目は次のようになる。

$$(12) \quad \left[ \begin{array}{c} \text{SYN} \left[ \begin{array}{c} \text{HEAD} \left[ \begin{array}{c} \text{AGR} \left[ \begin{array}{c} \text{PER} \text{ 1st} \\ \text{NUM} \text{ pl} \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

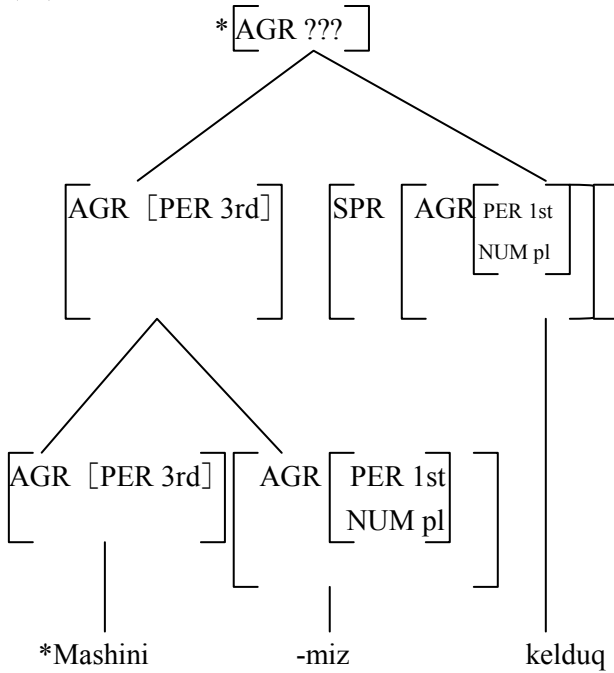
#### 5. 結論

ウイグル語の再帰代名詞は、(9)に示した語彙項目を持つということが出来る。この語彙項目と主辞・マーカー接尾辞規則との相互作用で、AGR 素性の単一化により(1)に示した用例が認可される。普通名詞との文法性の違いは、語彙項目の違いで説明される。構文木を(13)に示す。



一方、見かけは平行的であるが、普通名詞を用いた非文法的な例(6)の構文木は(14)のようになり、AGR 素性が単一化できないため、認可されない。

(14)



#### 参考文献

- [1] Ruslan Arziyev(2006). *Uyghur Tili*, Mektep, Almuta.
- [2] C. J. Pollard and I. A. Sag(1994). *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. The University of Chicago Press.
- [3] I. A. Sag and T. Wasow(1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*, Vol. 92 of CSLI Lecture Notes Series. CSLI Publications, Stanford, California.

#### 略語一覧

所接：所有接尾辞， 一：一人称， 三：三人称， 単：単数， 複：複数